令和６年度　学習指導改善調査事業　公開校実践事例報告会　活動記録

１　基本情報

（１）　研究主題：主体的・対話的で深い学びの実現　－子どもの声がつながる授業－
（２）　教　　科：算数科
（３）　期　　日：令和６年 11 月 14 日（木）
（４）　会　　場：糸魚川市立青海小学校

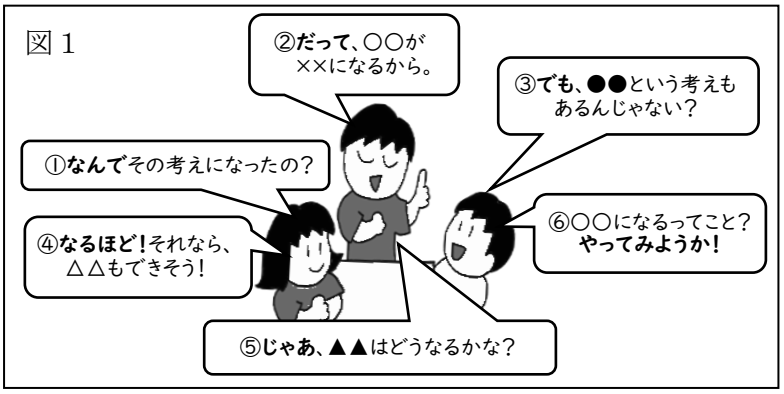
２　研究の概要

１年次は、「『主体的・対話的で深い学び』の実現 －『対話がある学び』を軸とした授業づくり－」という研究主題で研究を進めてきた。しかし、ペアやグループ活動では、分かる子どもが一方的に考えを伝える、発表するだけで終わってしまうことが多かった。子どもたちの双方向のやりとりになっておらず、対話を通して学びを深めることができなかった。また、職員間において「対話」についての共通理解ができておらず、目指す子どもの姿が曖昧な状態で授業を行ってしまっていた。

このような課題から２年次は、「対話」の部分をより具体化し、分かりやすく研修に取り組めるよう、研究主題を「『主体的・対話的で深い学び』の実現 －子どもの声がつながる授業－」とした。「子どもの声がつながる」姿を「子どもたち一人ひとりが考えを伝え合ったり、聴き合ったりしながら、活発に対話する姿（図１）」とし、この姿を日々の授業で見られるよう、研究を進めた。

以下の４点を対話の様相として職員間で共通理解をし、授業に取り入れながら実践した。

図１



① 考えを広げる対話…話す中で、自分の考えが増えたり、別の見方を知ったりする。
② 考えを確かにする対話…話す中で、自分の考えが整理され、自信がもてる。
③ 考えを練り上げる対話…話す中で、拡散された考えをまとめる。
④ 新たな考えに気付き、生み出す対話…話す中で、異なった方向から新しい考えが生まれる。

参考：上越教育事務所　学校支援課第２課　R６．３．６ Learning View Vol.3　「対話のある学びの様相」

また、子どもの声をつなげるために「教師の問い返し」「構造的な板書」「課題設定の工夫」の三つを重点化し、日常的な授業改善を図ってきた。具体的に右記のような取組を行った。

授業改善のための具体的な取組

- 授業公開/協議会 ⇒ １人１公開で授業力UP！
- 日々の授業参観 ⇒ 普段の授業から学び合おう！
- 自己評価 ⇒ 自分の「問い返し」を振り返ろう！
- 上越教育大学支援プロジェクトの協力 ⇒ 細かな授業分析！
- B-time（板書タイム） ※１
  ⇒ 授業の悩み相談 ＆ 授業改善☺で自信もUP！

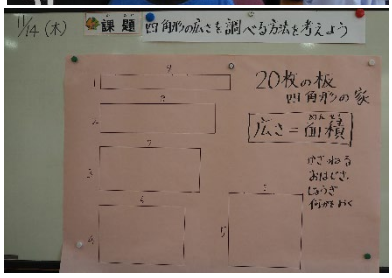
※１
B－time：週に１回、20 分間で行う研修。その週の算数の授業の板書を持ちより３、４人の職員で授業の流れや課題、子どもの様子について対話する。

３　授業の概要

（１）　授業者：長谷川　太郎

（２）　単元名：４年生算数「面積　広さの表し方や求め方を調べよう」

（３）　概　要：



本時では、子どもの声がつながる授業を目指し、いくつかの手立てを講じた。一つ目は、課題設定を明確にし、子ども一人ひとりが課題に向き合えるようにしたことである。本時では、「20 枚の板で囲まれた広さを比べるためにはどうするのか」という問いを投げかけ、子どもの興味を引き付けた。子どもたちが「やってみたい」、「知りたい」と思うような課題設定にすることで、一人ひとりが課題に向き合い、じっくりと考えることができた。実際に、子どもたちを教卓の前に集め、壁の板 20 枚のミニチュア模型を提示したり、目の前で模造紙にかき込んだりし、子どもたちが広さの概念を分かりやすく理解できるようにした。その結果、スムースに課題を捉え、全員が意欲的に取り組む姿が見られた。

二つ目は、具体物を用意し、子どもたちの多様な考え方に対応したことである。どのように考えたらいいか悩む子どもたちも見通しがもてるよう、全体でアイデアを出し合って共有したり、ハサミやおはじきなどの具体物を用意したりした。子どもたちの「紙を切って調べたい」、「シートに物を置いて調べたい」などの多様な考えに対応できるようにし、個人への配慮を充実させることができた。実際に子どもたちは、おはじきや消しゴムを置いたり、シートに線を引いたりしながら比べることができ、自由な発想の下、学習が進んだ。個人で考える時間が終わると、「もっとやりたい」、「もう少し時間が欲しい」という声が聞こえた。これは、上記の二つの手だてにより、子どもたちが課題を捉え、課題に向き合っていたからこそ聞こえた声であると感じた。

三つ目は、出てきた考えを収束するために、考える視点を明確にしたことである。展開の中で、グループで考えを出し合った後、『は（はやく）か（簡単に）せ（正確に）』の視点を提示した。視点を明確にすることで、自分の考え方についてもう一度考え直したり、友達同士で次時（公式の出し方）につながる考えを出し合ったりする姿が見られた。

（４）　指導者による指導の概要

・教師ではなく、環境に働きかけることで子どもは算数を学ぶ。
・「子どもの声がつながる授業」にするためには、発表する子どもも聞いている子どもも対話しながら、環境（課題）と向き合える状態をつくる。
・子ども同士の対話を生み出すための問い返しの積み重ねが大事である。
・数学的な見方・考え方は問題から生まれる。

（上越教育大学教授　岩崎浩　様）

４　研究の成果

当校職員からは、以下のような成果が挙げられた。

【子どもの姿】
・教師が問い返しをすることで、「答え」を求めるよりも、「どうやったらできるのか」について、子ども同士で対話する場面が少しずつ増えた。
・「なぜそう考えたのか」という問い返しを行うことで、何とかして言葉にして説明しようとする姿が見られるようになった。
・特定の子どもだけが話すということが減り、全員が課題に向かって考える姿がより見られるようになった。
・何でも正しい、合っているではなく、「でも」という言葉を用いて、疑問を話し合う姿が見られるようになった。

【教師の姿】
・子どもの理解度を見取りながら、その場面に合った問い返しをすることで、子どものつまずきを把握することができた。
・子どもにとって分かりやすく、必要感のある課題設定を意識することで、課題を明確にして授業を進めることができた。

一方で、見えてきた課題もある。それは、子どもの理解力に差があり、理解力のある子どもが対話の中心となってしまう場面があるということである。低位の子どもたちは、自分の考えに自信が持てなかったり、「これでいいのかな」と不安に感じたりしてしまう。対話を通してこのような不安感を改善することができれば、対話をすることの意義がさらに見出せると考える。低位の子どもたちも主体的に授業に参加し、自分の意見を安心して伝え合うことができる環境が必要であると考える。

今回の研究により、教師の働きかけ次第で子どもの姿、学級全体の学習に対する意欲が変わっていくことが実感できた。子ども同士の対話から生まれた新たな気付きは、子どもたちにとって大きな意欲につながる。教師が直接的にかかわるのではなく、子どもたち自らが課題に向き合い、解決していこうとする働きかけを行っていきたい。今後も、職員が日々の授業を振り返る場を大切にしていくと共に、学習指導改善調査の結果を参考にしながら、授業改善に努めていく。